

伝道講演会

聖書の人間観と真の慰め

2024年10月20日

人間は関係性の中で生きている

関係性に生きるとは

関係性の中で安心感を得たり、不安や落ち込みを覚えたりすること

乳幼児の中で育まれる基本的信頼感

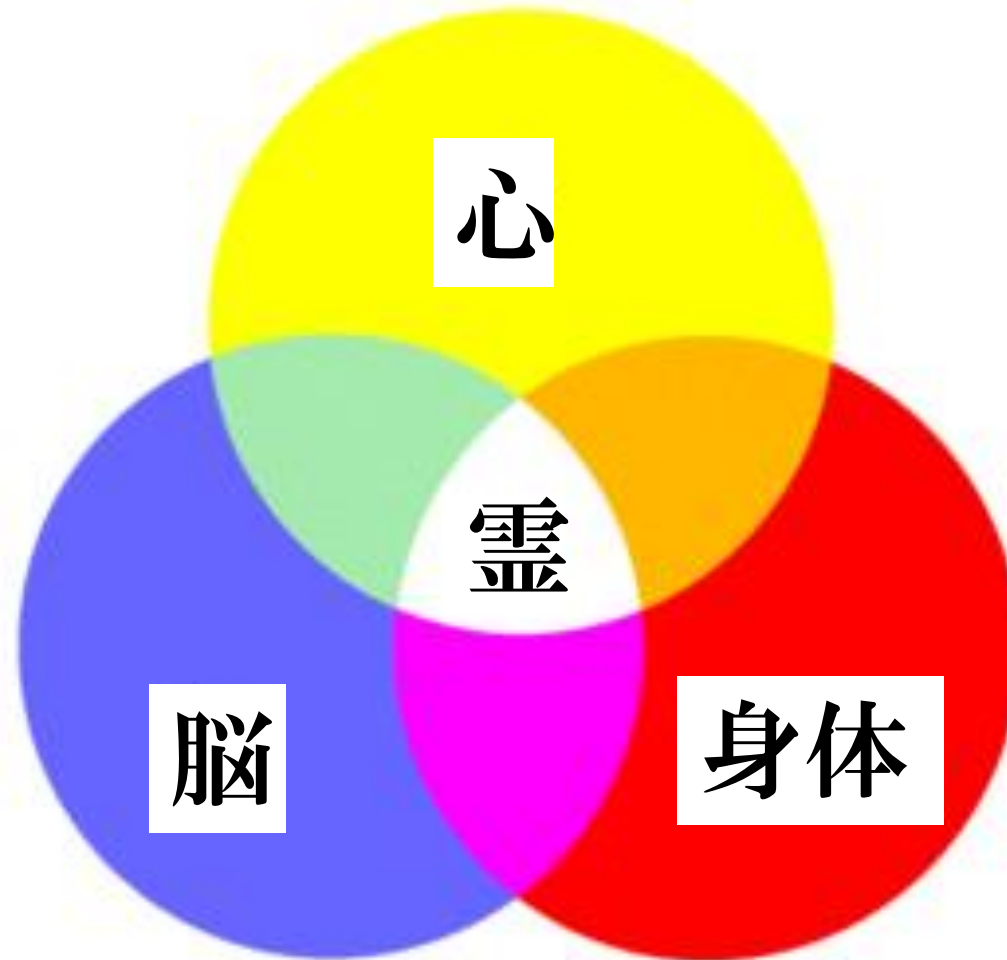
精神科医の仕事

- 個人の症状に対する診断や治療

関係性に対する援助

- 自分との関係性 → 内面の葛藤や生い立ち
- 他者との関係性 → 行動 自己表現
- 社会との関係性 → 相談 調整

人間の存在とは



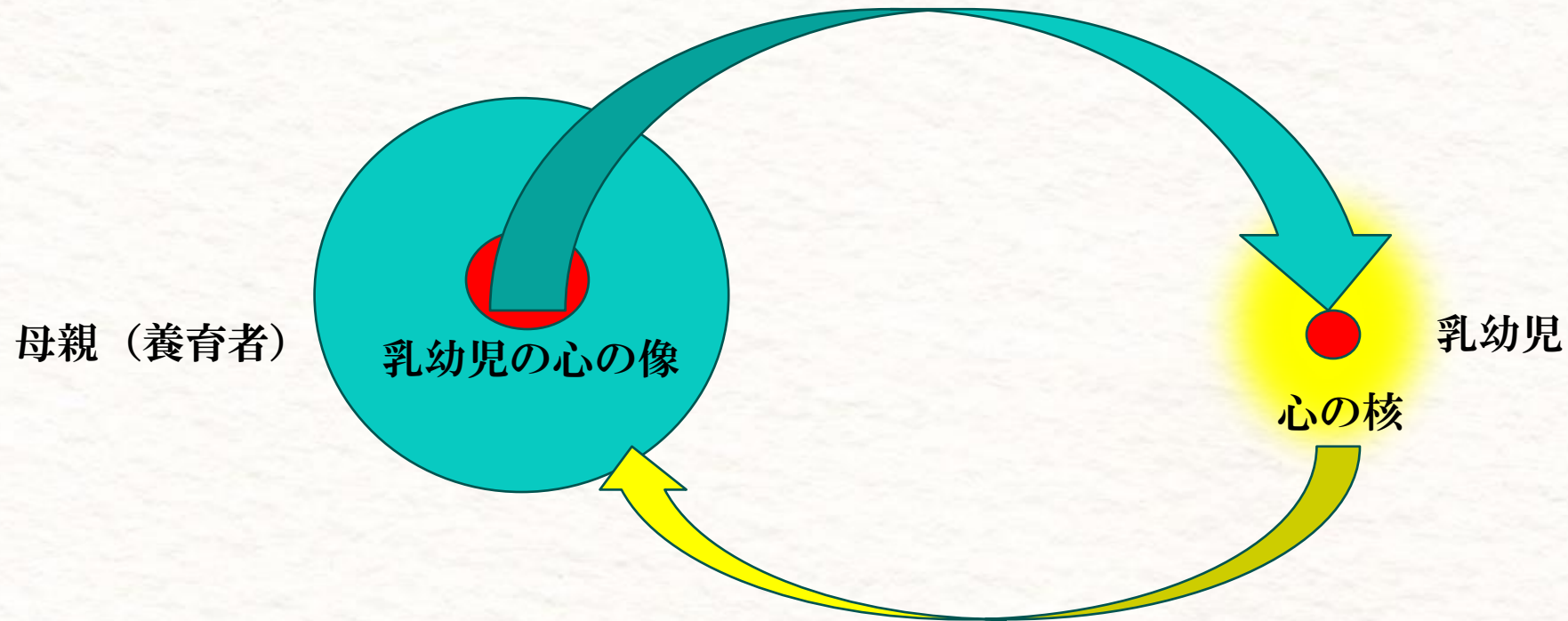
Spirituality (靈) とは何か

- 生氣
- 魂
- 愛情
- 絆
- 調和

人間にとって大切なものであることは直観的にわかるが、理解しづらいもの。

人間の根源的な安心感や安全感にかかわるもの。
日常生活の中で働いているもの。

母親（養育者）の心の中に乳幼児の心の像を思い描く 乳幼児の心の像を見い出して語りかける



あえて、霊とかスピリチュアリティとか言わなくてもいいのでは？
絆や愛情が必要なことは、誰でもわかっていること。

霊（スピリチュアリティ）の存在は、
霊自身^が痛むときに初めて認識される。

スピリチュアルペイン（靈的苦惱）

緩和ケア

グリーフケア

理不尽な出来事に対する「なぜ？」という問い
これからどうなるのかという不安、怒り、絶望・・・

スピリチュアルペイン（霊的苦悩）とは、あたりまえの
関係性が崩れるときに始まる。

- 自分との関係性
- 他者との関係性
- 社会との関係性
- 時間との関係性

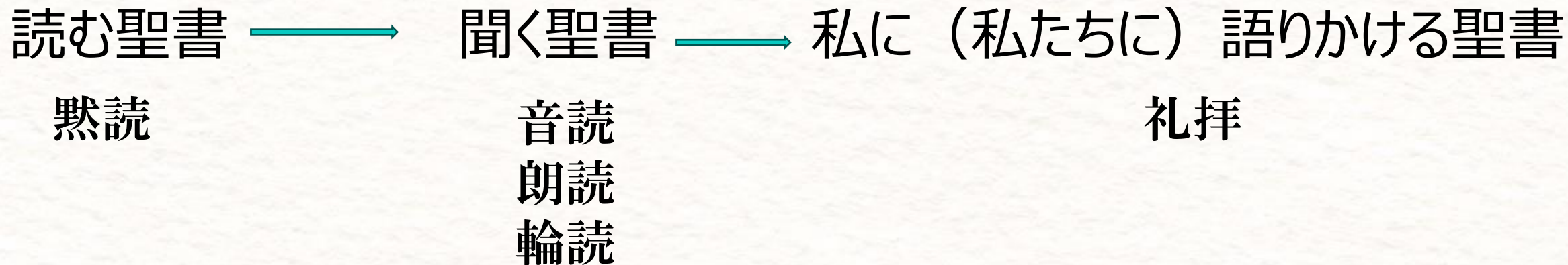
聖書は私たちに何を語りかけているのだろうか。

聖書は

神様と人間（私たち）の関係性について
神様の霊である聖霊によって語りかけています。

聖霊によってとは

聖霊の働き



神は人を自分のかたちに創造された。

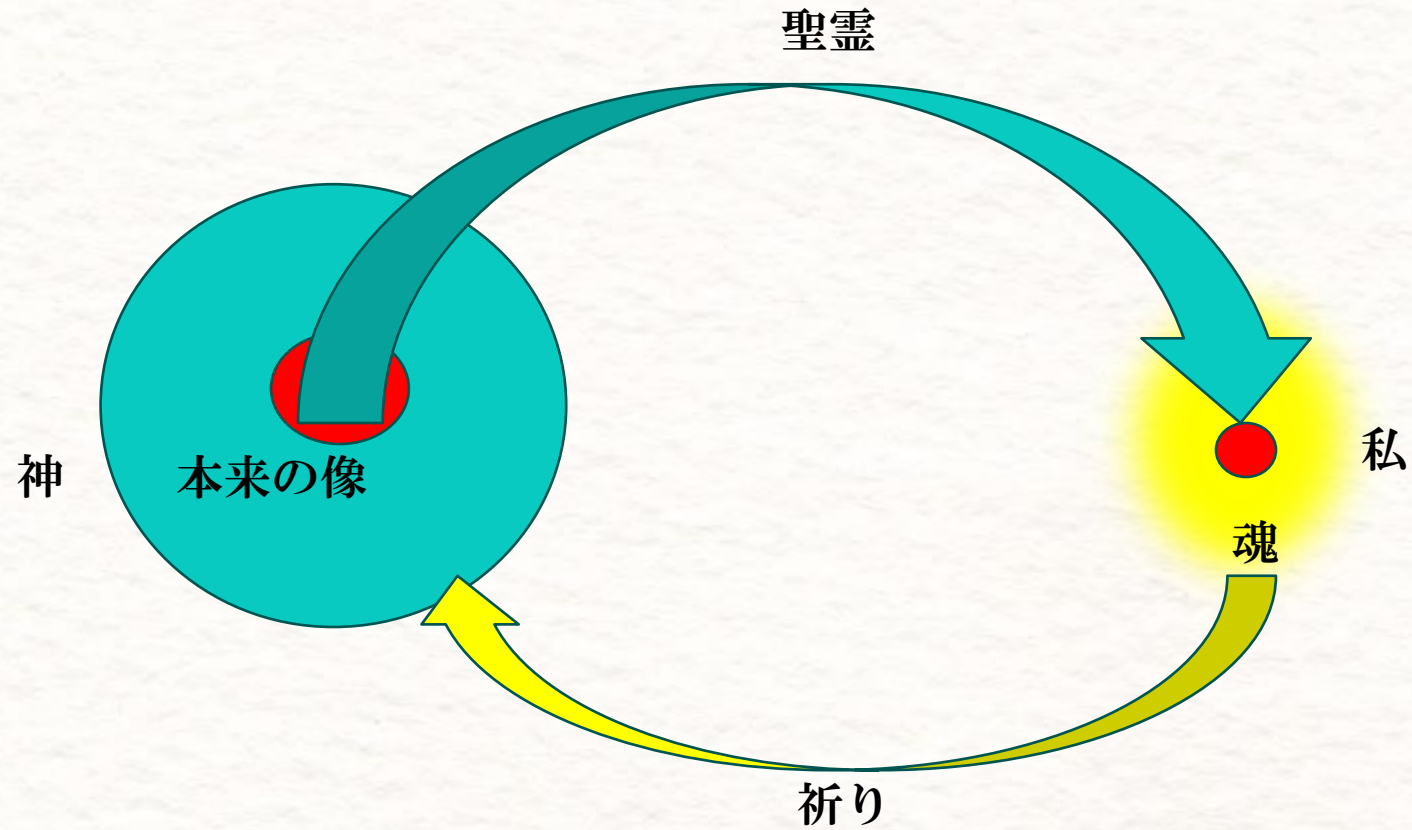
(創世記1章27節)

- 「我々のかたちに、我々の姿に人を造ろう。」という神様の語りかけによって、人間は造られた。
- 人間には、神様に似せて造られた像という本来の像があり、神様によって見出されている存在。

神は人を自分のかたちに創造された。神である主は、土の塵で人を形づくり、その鼻に命の息を吹き込まれた。人はこうして生きる者となった。（創世記2章7節）

命の息とは、神の霊であり、「呼吸」という意味ももつ。命の息によって、肉体的な側面においても心理的な側面においても人を生きる存在とした。人間は神の命の息によって、語りかけられて、生きる存在となった。

神様はご自身の心の中にある本来の私を見い出して、
語りかけてくださるお方



スピリチュアルペイン（霊的苦悩）とは、あたりまえの関係性が崩れるときに始まる。

- 自分との関係性
- 他者との関係性
- 社会との関係性
- 時間との関係性
- 神様との関係性

人間の危機（霊的苦悩）とは

神様との関係性の危機。
霊的苦悩とは、聖霊の苦悩。

霊もまた同じように、弱い私たちを助けてくださいます。私たちはどう祈るべきかを知りませんが、霊自らが、言葉に表せない呻きをもって執り成してくださるからです。

（ローマの信徒への手紙8章26節）

ルカによる福音書15章11節～32節
「いなくなった息子」のたとえ

・ある人に息子がいた

弟「お父さん、私に財産の分け前をください」

父親は二人に身代を分けてやった。

ルカによる福音書15章11節～32節
「いなくなった息子」のたとえ

- 旅に出た弟は、身を持ち崩して、財産を使い果たした。
- ひどい飢饉が起きて、食べ物がなくなった。
- 裕福な人のところに身を寄せたが、豚の世話をさせられるだけで、空腹は満たされなかった。

ルカによる福音書15章11節～32節
「いなくなった息子」のたとえ

そこで、彼は我に帰った。

本心に立ち帰った
本来の自分に帰った
本当の自分が帰るべき場所に気づいた

ルカによる福音書15章11節～32節
「いなくなった息子」のたとえ

・雇い人の一人にしてもらおうと、父親のもと
に行った。

・父親は遠くから息子を見つけ、憐れに思
い、走り寄った。

ルカによる福音書15章11節～32節
「いなくなった息子」のたとえ

・息子「私は、天に対してもお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。」

・父「祝宴を開こう。死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかった。」

ルカによる福音書15章11節～32節
「いなくなった息子」のたとえ

・兄は怒って家に入ろうとはせず、父親が出て来てなだめた。

慰め

・父「子よ、お前はいつも私と一緒にいる。
私のものは全部お前のもの。しかし、弟は死んでいたのに生き返った。」

父の慰めと招きとを、拒否する長男を、なお
慰める父の言葉で、この物語は終わる。

罪の力とは、関係性を傷つけ、絶ち切る力。
人を孤立させる力

二つの罪

- 弟の罪
- 兄の罪

- 人は自分の中にある罪の力によって傷つく存在
神様との関係性において傷つく
自分との関係性において傷つく
他者との関係性において傷つく

傷ついた癒し人 イエス・キリスト

この方の打ち傷によって、あなたがたは癒やされたのです。

あなたがたは羊のようにさまよっていましたが、今は、魂の牧者であり監督者である方のもとへ立ち帰ったのです。

(ペトロの手紙一 2章24節～25節)

慰められるということ

「慰められる」とは、見い出されて語りかけてもらえるという体験。そこからおら、神様との新しい関係性が始まる。語り掛けてもらわないと人は常に不安と恐怖に苦しむことになる。「あなたを愛している」「あなたは大切な存在だ」「あなたの罪は赦されている」そう語りかけられていることが大切。

神は、あらゆる苦難に際してわたしたちを慰めてくださるので、わたしたちも神からいただくこの慰めによって、あらゆる苦難の中にある人々を慰めることができます。 コリントの信徒への手紙二 1章4節

語りかける神のコトバ 言葉の奥にあるコトバ 魂の糧となるコトバ

(若松英輔)

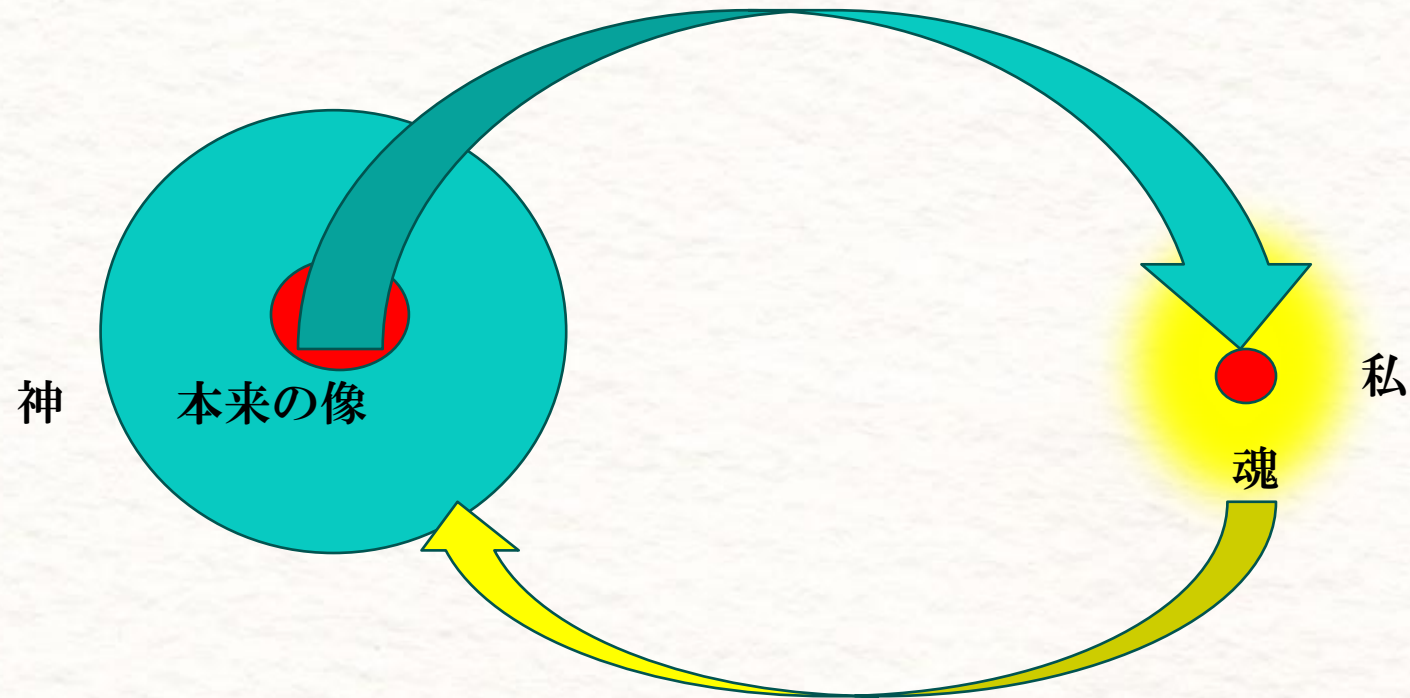
・人はパンだけで生きるものではなく神の口から出る一つ一つの言葉によって生きる。 (マタイによる福音書 4章 4節)

・初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。言によらずに成ったものは何一つなかった。言の内に成ったものは、命であった。この命は人の光であった。

(ヨハネによる福音書1章 1節～3節)

言 (ことば) とは、言葉以上の神のコトバ (ロゴス)

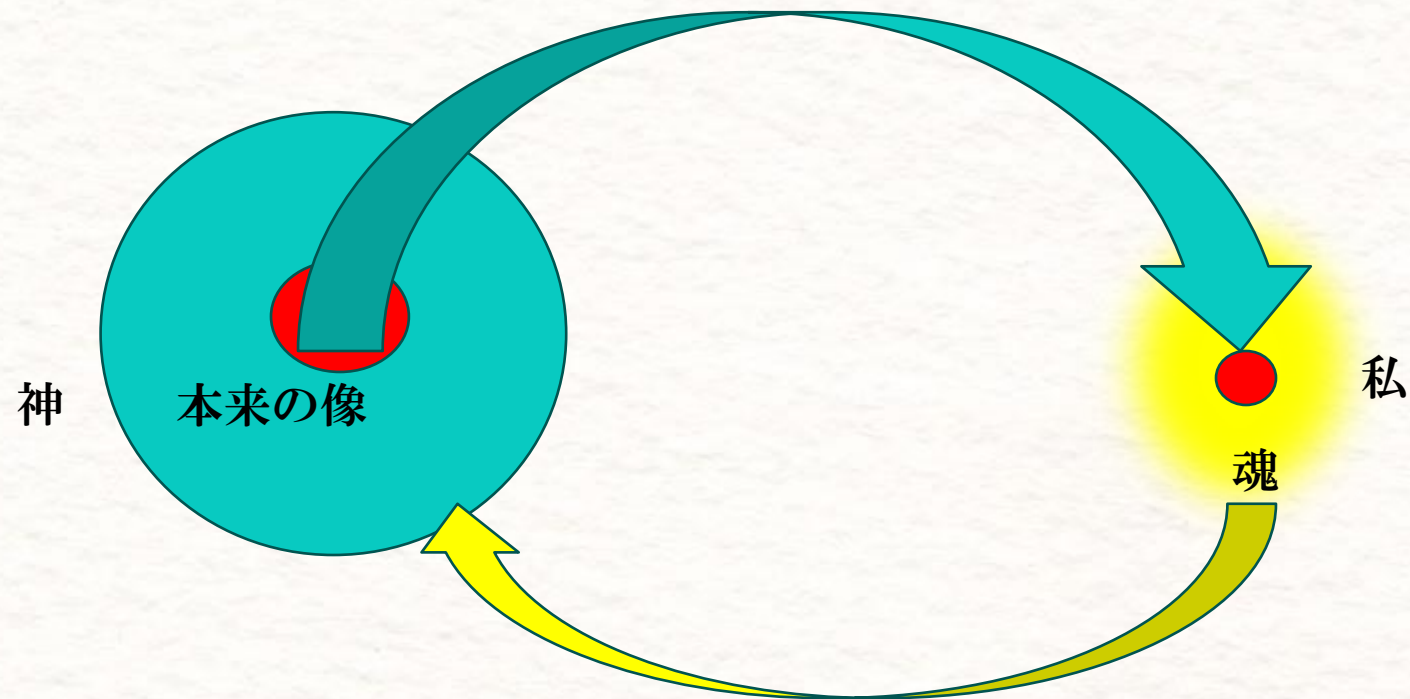
神様はご自身の心の中にある本来の私を見い出して、
コトバによって語りかけてくださるお方



子どもは毛穴でコトバを聴く（森里信生）

コトバは全身で受け止めるもの

神様はご自身の心の中にある本来の私を見い出して、
コトバによって語りかけてくださるお方



洗礼は神様のコトバによって成長する（生きる）人生のはじまり

私が植え、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させてくださったのは神です。

ですから、大切なのは、植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神なのです。

（コリント一3章6節～7節）

人間は神のコトバによって、語りかけてもらうこと
によって生き、ありのままの姿へと成長する喜び
を味わう。

成長とは、強くなることではなく、ありのままの姿へと近づいていく
命の喜び

洗礼はゴールではなく、そのスタート